

UMASS Amherst 校図書館視察報告

井上, 創造
九州大学附属図書館研究開発室 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/8090>

出版情報 : 九州大学附属図書館研究開発室年報. 2006/2007, pp. 43-49, 2007-06-01. 九州大学附属図書館研究開発室
バージョン :
権利関係 :

UMASS Amherst 校図書館視察報告

井上 創造*

〈抄 録〉

マサチューセッツ大学アマースト校のメインの図書館である、Du Bois Libraryの訪問の報告をする。

米国の大学図書館の多くはこの5年間ほどでLearning Commons (Library Commons, Information Commonsと呼ぶところもある)を導入して利用者増大に成功している。Learning Commonsとは、「そこだけで学生生活のほとんどを完結することができる場所」と言える。この大学は、他の大学に先駆けてLearning Commonsを導入しており、その経験から学ぶものは多い。

Visiting the Library of UMASS Amherst

INOUE Sozo*

1. はじめに

去る2007年3月に、マサチューセッツ大学アマースト校 (UMASS Amherst: University of Massachusetts Amherst) のメインの図書館である、Du Bois Libraryを、駆け足ではあるが訪問したので報告する。今回の訪問の主な目的は、九州大学に2006年夏に滞在していたComputer Science学科の大学院生および、その教員を訪問するためであったが、2日間のうち数時間図書館を訪問する時間があった。

米国の大学図書館の多くはこの5年間ほどでLearning Commons (Library Commons, Information Commonsと呼ぶところもある)を導入して利用者増大に成功している。Learning Commonsとは、「そこだけで学生生活のほとんどを完結することができる場所」と言える。Du Bois Libraryの予算は年間20数億円で、米国の大学の中ではそんなに予算が多いわけではない(文献4参照)。しかし、他の大学に先駆けてLearning Commonsを導入しており、その経験から学ぶものは多い。

なお、Du Boisとは人名で、ハーバード大学で初めて博士号をとったアフリカ系アメリカ人である(文献1,2参照)。

以下は、2節が図書館の概要で、3節がLearning Commonsを紹介するものである。4節

でまとめと、日本における展望と課題を述べる。

2. Du Bois Library

Amherstは、Massachusetts州の、Bostonから車で2時間ほどかけたところにある町である。大学の周りのはのどかな光景が広がるところで、メイプルシロップが名産である。Amherstにはそこだけで大学が5つあり、完全な学生街である。UMASS Amherstは2万人ほどの学生を擁し、ほとんどの学生が寮に住む。

2.1 24時間開館の図書館

UMASS Amherstのメインの図書館であるDu Bois Library (以下、図書館)は、キャンパスの真ん中にどかんと28階建て(機械室を除くと26階)で、周囲に高い建物が無い地域であるから、遠くからでも望む事ができる。図1は、図書館の全景である。下の方に筆者が小さく写っているのが分かるであろうか。

*いのうえ そうぞう 九州大学附属図書館研究開発室准教授 E-mail:sozo@lib.kyushu-u.ac.jp



図1 図書館全景

この図書館は、金曜と日曜の夜以外は、24時間開館している。図2および図3は、図書館の入り口である。図からも分かるように、下記のカウンタが別々にある。これは利便性というより、建物の構造上こうなっているということであった。

- 自動Check in/out：自動貸し出し機
- Check in/out Room：貸し出し・返却の部屋
- General Information カウンタ
- Building Operation カウンタ：これは、警備員の詰め所および、利用者が安全上の相談をするカウンタである。

以降で述べるが、Learning Commonsにおけるカウンタも、業務毎に分かれていた。

なお、自動貸し出し機とBuilding Operation以外は、夜は閉まるとのことだった。



図2 入り口



図3 入り口を内部から見たところ

2.2 Cafe

図3の奥に見える丸いつり下げ看板は、Procrastination Caféと呼ばれる簡単な売店とテーブルがあるスペースである。Procrastinationとは、「ぐずぐずすること、現実逃避」という意味であるが、図書館で勉強に疲れた利用者が現実逃避をするところという、ウィットに富んだネーミングなのであろう。

このCaféは、深夜1時までオープンしている。Library Coffee Cupという名前のカップが売っている。これは倒れてもこぼれにくい構造になっていて、このカップを持参してコーヒーを買えば、割引されるという。これは利用者に飲み物の持ち込みは許すが、極力書籍が汚れないようにしたいというスタッフの思いの反映なのであろう。

2.3. Ms. Sharon Domier

筆者は訪問した初日、East Asia、特に日本が専門のライブラリアンであるMs. Sharon Domierと、短時間ではあったが議論した。Ms. Domierは図書館情報大の修士を卒業し、Amherst地域のいくつかの大学に日替わりで勤務している。筆者が訪問する一週間前には、お茶の水女子大の図書館職員が訪問したそうである。日本との交流に一役買っている人である。

Ms. Domierとは、ここ5年ほどの米国の図書館の変化について熱く語った。それは事象に述べるLearning Commonsの事であるが、そのほかにも、

図書館の持つ資源とは、

1. Surroundings (環境)
2. Collections (蔵書)
3. People (利用者)

である。以前は図書館は2のみ重視していたが、この5年間で図書館は、1と3も重視するようになった。

図書館にはGoogleの様なITだけではできないことがある。それは、場所である。

というようなことを議論した。

前者は、Ms. Domierが言ったことであるが、私も以前から人、本、場所が資源であると考えていただけに、強く印象に残った。また後者は筆者が言ったことであるが、Ms. Domierも面白いと思ってくれた様子だった。

3. Learning Commons

この図書館は、5年ほど前にLearning Commonsをいち早く導入して、様変わりしたそうである。Learning Commonsとは、「そこだけで学生生活のほとんどを完結することができる場所」と言えよう。Learning Commonsの導入により、実質利用者が急増し、そのせいで大学内での予算措置に成功し財政状況が一気に良くなったそうである。Learning Commonsのために、図4のような昔ながらのマイクロフィルム庫や本棚の一部を、閉架に一掃してスペースを確保したという。



図4 昔ながらのマイクロフィルム庫

この章では、Ms. Emily Allingに案内してもらったLearning Commonsの概要を述べる。Learning Commonsは、金、日曜の夜以外は24時間空いている。

3.1 多目的スペース

1階から階段を下りてLearning Commonsに入ると、まず見えるのが多目的スペースである。ここは普段は図5のように机が並べられているが、展示や集会などのイベントがあるときには取り払ってスペースを作る。このすぐ横には後述のPCの端末があるが、このようなイベントがあってもPCの端末などの他のスペースは利用できる。



図5 多目的スペース

3.2 情報サロン

多目的スペースの横には、OIT（情報処理センター）が管理するPC約200台と、図書館が管理するPC約60台が並ぶ。前者には、UniversityライセンスのOfficeソフトウェアなどが入っているが、後者には、入っていない。ただしどちらも、電子ジャーナルなどのWebリソースは、認証なしで利用できる。

PCは、図6～図8に示すように、パーティションで仕切られた机やそうでない机など、様々な形態のブースや机に置かれている。



図8 情報サロンの風景3



図6 情報サロンの風景1

図9は、図書館が管理するPCが使用中かどうかを一覧できる、訪問の一週間前に導入されたばかりのシステムである。技術的には、有線LANポートへの接続有無により使用中かどうかを判別している。情報サロンの入り口付近の目立つ場所においてあり、利用者も多い様子だった。



図7 情報サロンの風景2

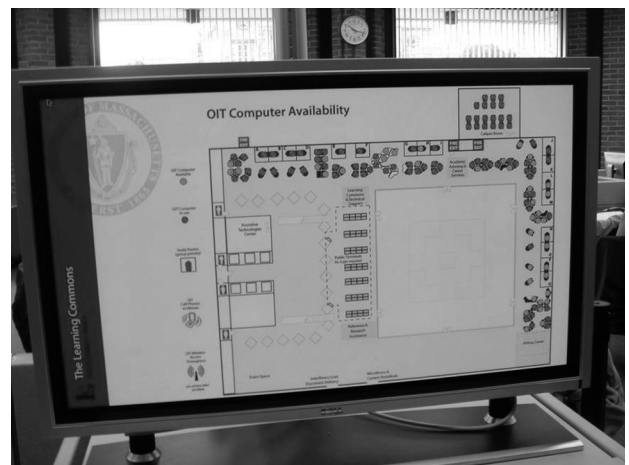


図9 PCの利用状況を一覧できるシステム

3.3 ミーティングスペース

図8の奥に見えるスペースは、ガラスで仕切られたミーティングスペースである。ここでは予約制ではなく、空きがあれば自由に使うことができる。別の階におけるブースは、期間予約といった種々の形態の予約ができる。

3.4 設備

コピー機やプリンタ、自動販売機における決済は、一般的に普及しているPharosシステム（文献3参照）と呼ぶ磁気カードと連動したポイントシステムを利用している。このシステムでは、時間帯による利用制限も行うことができる。

図11は、文具の自動販売機である。また、図12は携帯電話で会話をするためのボックスである。携帯電話での通話は情報サロンのような他のスペースでも許されているが、希望する利用者のために図のような携帯電話ボックスも用意されている。



図10 テクニカルサポートのカウンタ



図11 文具の自動販売機



図12 携帯電話ブース

3.5 各種カウンタ

ここでは他の機関の分室も含めた、各種のカウンタを紹介する。ほとんどのカウンタが、昼から夜までの間オープンしている。これは授業時間と重複して実質的な利用時間が減らないためである。

スタッフは、職員も学生スタッフも3交代で勤務している。職員は時間帯によって給料に差があるが、学生には差がないそうである。

各種センター分室

各種の学内センターが、Learning Commons内に分室を置いている。学生は、困ったことがあればLearning Commonsに来ればよいというわけである。

図13は、執筆指導センターのカウンタである。論文の執筆指導や、留学生の英文筆記の指導などをおこなう。



図13 執筆指導センターのカウンタ

図14は、就職指導センターのカウンタである。



図14 就職指導センターのカウンタ

リファレンスカウンタ

図6の手前に写っているのが、リファレンスカウンタである。リファレンスカウンタは対面したリファレンスだけではなく、コンピュータネットワークを使ったオンラインリファレンスにも対応している。メールをはじめ、MSN Messenger, Yahoo MessengerなどのInstant Messagingにも対応している。これらはメールと同じくテキストでの会話でしか対応していないが、その場で回答が得られることがメールと異なる。オンラインの場合は、近くの大学のスタッフが協力して答える場合もある。

3.6. クラスルーム



図15 クラスルームの風景

Learning Commons内には、講義室もある。教員が希望すれば、教員の講義のうち数時間を、図書館職員が受け持ち、情報検索をはじめとする講習をする。

3.7 補助装置センター



図16 補助装置センター

図16は、Assitive Technologies Centerと呼ばれる、身体が不自由な人のための特別な入出力装置が置いてある。ここはセンターとあるがそのような組織があるわけではなく、図書館と情報処理センターが共同して運営している。

4. おわりに

今後日本の大学も、Learning Commonsを採用するかどうか選択を迫られるだろう。たとえその全部を導入しないにしても、大学において、各種窓口のオープン時間を、授業とずらせることは非常に重要だと考えられる。筆者も学生のころ、授業時間以外に事務室を訪問できるのは昼休みしかなく、昼休みに訪問したら昼食のため受付けてくれなかった経験があり、授業に出る学生ほど困るしくみには改善の必要を感じた。

ただLearning Commonsをはじめとする新しい仕組みには、大学の雇用形態の問題など、制度上の問題も含まれるため、奥深い議論と万全の準備が必要であろう。

なお、筆者が同時に訪問したComputer Science学科の学生に聞いてみたところ、あまり図書館を使ったことがない人が多かった。特に理系の学生は、Googleをはじめとするインターネット検索エンジンで十分だと考える人がおおいためであろう。しかし見方によっては、理系の学生はLearning Commonsの恵まれた環境を知らずにごさしているともいえる。このような逆の意味での情報格差が生まれつつあることも興味深

い。Learning Commonsのように、「LibraryにLifeを」持ち込む手法だけでなく、情報技術を積極的に活用して、「LifeにLibraryを」持ち込むこともひとつのアプローチではなかろうか。

最後に、訪問に対応していただき、またこの原稿に校正を加えていただいたMs. Sharon Domier氏とMs. Emily Alling氏に感謝いたします。

参考文献

- [1] University of Massachusetts Amherst Libraries, <http://www.library.umass.edu/>.
- [2] David L. Lewis, “W.E.B. Du Bois: Biography of a Race : 1868-1919 (Web Dubois Biography of a Race),” Henry Holt & Co, 1993.
- [3] Pharos Systems International, Inc., <http://www.pharos.com/>.
- [4] University of Massachusetts Library, Report of the Library 2006, <http://www.library.umass.edu/whatsnew/AnnualReport06.pdf>
- [5] Association of Research Libraries Statistics, <http://fisher.lib.virginia.edu/arl/>.